

【予稿集】

学生主体による本を活用したコミュニティづくりの可能性と展望

ービブリオバトル@伊勢河崎と伊勢河崎一箱古本市の実践事例からー

岡野 裕行*

*皇學館大学文学部国文学科

*h-okano@kogakkan-u.ac.jp

皇學館大学では、過去 2015 - 2016 年の 2 年間にわたり、学生主体による地域連携事業の一環として、地元の伊勢河崎地区の祭りの開催に合わせ、一箱古本市の開催・運営と、ビブリオバトルの一般公開活動を行った。本発表では、本を活用したコミュニティづくりの実践事例をもとにして、学生主体による地域連携活動の可能性と、今後の課題や展望を示したい。

An Exploration the Possibilities and Prospects for a Student - Directed Book Community A Case Study of a Bibliobattle and a Secondhand Book Market in the Kawasaki Area of Ise City

Hiroyuki OKANO*

*Department of Japanese Literature, Faculty of Letters, Kogakkan University

1. はじめに

NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆は、伊勢河崎商人館の管理運営を行いながら、毎年 10 月下旬に「河崎商人市」を開催している。皇學館大学では、学生主体による地域連携活動の一環として、2015 年から「河崎商人市」への参加と企画提案を行っている（国文学科岡野研究室，図書館サークル「ふみくら倶楽部」，ビブリオバトルサークル「ビブロフィリア」による三団体の合同企画）。

本稿では、伊勢河崎地区で実施したビブリオバトルと一箱古本市の事例をもとにしながら、学生主体による本を活用したコミュニティづくりの可能性を探り、今後の展望について考えてみたい。

2. 地域連携活動の経緯と目的

2.1 ビブリオバトル@伊勢河崎

普段は皇學館大学附属図書館ラーニングコモンズにて、学生同士でサークル活動を行っているが、それを一般市民に公開し、伊勢のまちにビブリオバトルを普及させていく目的で実施した。実施に

際しては、ビブリオバトル普及委員会が定めている公式ルールを遵守しつつ、観覧自由形式でのエキシビジョンゲームとして会場で披露した。

2.2 伊勢河崎一箱古本市

三重県内の初めての一箱古本市は、2014年に津市で開催されたもので、伊勢はそれに続く二番目の事例となる。津市及び東京「不忍ブックストリート」の事例を参考として、伊勢市内を中心に三重県内外から出店参加者が集まった[1]。2015年は24組、2016年は18組の出店参加者数となった。

3. 本を活用したコミュニティづくり

本を活用したコミュニティづくりの手法については、たとえば内沼晋太郎が「本のある空間」「本遊び」「本との出会い」などのキーワードで指摘しているように、現在までにさまざまなものが考案され、全国各地で実践がなされている[2]。

3.1 コミュニティづくりの目的

ビブリオバトルや一箱古本市などのような本

を活用したコミュニティづくりの目的は、以下のようによまとめることができる。

- ①ある人物が所有する個人蔵書を、その人物の手元から別の人物の手元に移動させるためのきっかけと場をつくり出す。
- ②ある人物が持っている読書体験を言語化し、別の人物に伝えられる形式に整えるための動機づけを与える。
- ③ある人物が持つ読書体験を、別の人物に伝えるためのきっかけと場をつくり出す。
- ④本との出会いの場を創出することで、新しい読書体験を得るためのきっかけを与える。

このような本にかかわる活動の目的は、「世の中の本の位置を別のところに動かすこと」(本や本棚の適切な配置を考えること)と、そのような状況をつくることによって「人々の読書欲を刺激すること」(本への関心を高めること)に整理できる。

3.2 コミュニティづくりの要素

ビブリオバトルや一箱古本市などの活動の特徴を、コミュニティづくりの面から捉えてみると、以下の四つの要素に分けて考えることができる。

- ①組織や人の管理の問題
主催団体、主催者(企画者)、学生スタッフ、出店参加者、バトラー、一般来場者
- ②本の流通の問題
商品としての古本、紹介用のおすすめ本
- ③本の収納方法の問題
手荷物、可搬性のある本箱、固定された本棚
- ④関連情報の流通や整備の問題
開催情報、進行・運営情報、出店参加者情報、書誌情報

実施に際しては、以上のような点を企画の意図や目的として整理し、開催日までの準備や作業と並行して、学生スタッフが関われる作業の範囲をあらかじめ明らかにしておくことができる。

3.3 コミュニティづくりで目指すこと

以上のことは、「どうすれば人から人へと本が移動していくのか」「本を動かして見せることで、人間はどのような影響を受けるのか」を追求することと言い換えられる。それを可能にするためには、以下の点を意識しておくことが必要となる。

- ①本の可搬性の度合いを意識し、それらを届けたい人たちのもとに運んでいくこと。
- ②本を並べる装置としての本棚の機能に注目し、他者が手に取りやすい環境をつくること。
- ③開催情報や書誌情報を拡散されやすい状態に整え、積極的な情報発信と記録化を行うこと。

4. コミュニティづくりの可能性と展望

学生が主体となり、本を活用したコミュニティをつくり上げていく過程には、以下のような可能性を見出すことができる。

- ①人々の所有する本の位置や人とのつながり方を変え、新しい場所に本を配置できる。
- ②本をきっかけにコミュニティをつくり、人々の交流や学習を支援する仕組みを提供できる。
- ③人の動きや関連情報の扱いなど、コミュニティ創出に必要な条件を意識することができる。

以上のことから、学生主体によるコミュニティづくりでは、「本を持ち運びできる範囲を地域のなかのどの部分にまで広げることができるか」というように、その領域を意識化することが必要となる。また、「本を介して他者と接する機会をどのようにつくり出すのか」という点から、必要な関連情報を整備し、人々の活動に刺激を与える手法や考え方を身につけていくことも求められる。

注・文献

- [1] 南陀楼綾繁. 一箱古本市の歩きかた. 光文社, 2009, 316p.
- [2] 内沼晋太郎. 本の逆襲. 朝日出版社, 2013, 176p.